

令和4年度 第1回 不登校児童生徒等の学びの継続に関する懇談会（オンライン）  
意見交換要旨

- 1 日時 令和4年6月30日（木） 10:00～12:00
- 2 場所 長野県庁8階審問あっせん室（web開催）
- 3 出席者 別紙「構成員名簿」参照
- 4 内容
  - (1) 開会
  - (2) あいさつ（県民文化部こども若者局長 野中 祥子）
  - (3) 報告事項
    - ①「はばたき」(Vol,1) について
    - ②令和4年度事業について 意見交換
  - (4) 意見交換
    - ※事務局より説明：学習評価、評価に係るアンケート結果、長野県立高校入試について
    - ①「子どもたちの多様な学び」の評価について
    - ②意見交換
  - (5) まとめ（教育次長 今井 義明）
  - (6) 連絡事項
  - (7) 閉会

【意見交換 要旨】

(3) 報告事項

荒井座長： これまでの本懇談会の取組として、三つほどございます。

一つ目は、冒頭紹介いただきました『はばたき』です。昨年の段階においてもまだまだ不登校児童生徒に対する「眼差し」に誤解や偏りがあるという現状認識が共有されたことを受けて、「不登校は問題ではない」ことを改めて確認しております。また不登校児童生徒に対する大人の関わりとして社会的な自立のための学びの力を育むことを中心に据えることが確認されました。

他方、ここでの「社会的な自立」とは何なのか、これが個々人のお考えや立場によって相当捉え方が違うということも明らかとなりました。不登校児童生徒はこれからの新しい社会を作っていく希望や可能性の塊です。そのような中で、昨年度は一步ずつ議論を進めていくために学校や教育機関として何ができるのかという論点を設定し、「出席扱い問題」に関しては個人的にある種の「終止符を打った」つもりです。ここでは、できる限り積極的に出席を認めていく姿勢を前提とした上で、要件主義的にチェックリストを設ける形ではなく、事例ベースで先例を掲載し、学校長の意思決定を軸にフレキシブルに「出席扱い」としていくことができるような方向でまとめさせていただきました。

二つ目は、モデル事業の取組です。昨年度、そして今年度も、小諸市、千曲市、安曇野市、松川町の4つの自治体にご協力いただいています。本日皆様からいただく意見に関しても、4自治体のモデル事業において実証可能なものとなるか検討していただきたいと思っておりますので、忌憚のないご意見をいただければと思っています。

三つ目は県民文化部次世代サポート課が中心となって推進しております「不登校児童生徒の学校以外の『まなびの場』支援事業」です。憲法第89条の「公金支出の制限」規定の存在を踏まえて、次世代サポート課では、モノあるいは専門人材に関する支援を行っているところであります。

市川委員： 今荒井座長がおっしゃった出席の問題について、要件ごとのチェックではなく、事例でということについては大変ありがたいです。学校に近づくだけで震えたり、学校は絶対無理と言ったりしている子がフリースクールに電車に乗って毎日通ってくるわけです。友達とも関わって、教科学習も厭わずにやり、本当に生き生きとした姿が見られます。なぜ、フリースクールなら来て学べるのかを見ていくことはとても大事であって、それを一つ一つ重ねていければよいと思っています。なので『はばたき』の方向性はすごくよいと思っていました。学校だけで全部請け負うのではなくて、評価も、学校の仕組みに当てはめる方向性ではなくて、その子が大きい目的のためにどう歩んでいるかという点について語れたらいいなと思いました。

荒井座長： なぜ、その子はフリースクールなら学べるのかという現実には、学校中心とした教育関係者は真摯に向き合わなくてはならないと思っています。現実が先行する中で制度的枠組みが未だ追いついていない状況かと思えます。

甘利委員： 終止符という言葉に対して非常にありがたいと思った反面、実はここが始まりと思っています。私達の親の会「P-Smile」の5月の会で「自宅で勉強していることが出席扱いにしてもらえた」というお母さんの話があり、私達びっくりしました。教育機会確保法という法律を私達詳しく知らなくて、改めて勉強させていただいている最中です。7月に行われる P-Smile の会ではこういったことをどんどん発信していこうと思いますし、本当にここからが始まりと思いました。

また、あるお母さんからは「公立高校の前期試験を受検したけれど、出席日数が足りないということで落とされてしまった」という意見がありました。自宅で一生懸命学習していたそのお子さん、出席日数が足りないことで前期の試験が不合格で、心折れて後期試験受けられなかったんですね。現在通信の学校に進学はしたのですが、

やはりかなり大きな心の挫折になっているという事実があります。本当にここからがスタートと私自身は感じています。ぜひ皆さんで頑張っていけたらと思いました。

荒井座長： 「終止符」という言葉だけ独り歩きしまつてはよくないですが、お互いの状況を理解して情報発信を続けていくことは、啓発活動という点と関わって重要かと思っております。『はばたき』は示して終わりではなくて、内容を共有し、適切に活用していく努力をしていかななくてはならないと思っています。まさに、子どもたちの尊厳を守るためにも、関係者が相互に学び歩み寄っていく必要があると思っています。

三輪委員： 『はばたき』の中で大事だなと思っているのは、子どもたちの視点に立って支援をしていくという点です。出席扱いについても、難しい問題も実はあって、学校にいるとその出席扱いを望まない生徒さんもあり、その子どもが何を选ぶのかを大事にした上で、個別の対応が必要と思っています。諏訪市では2年前に出席扱いに伴うガイドラインを策定し、校長は積極的に出席扱いにしています。

前期選抜の話もありましたけれども、実際に不登校のお子さんでも私が勤務していた中学校から前期選抜で合格して高校に行った子もいますので、その子の意欲みたいなものを取り入れてやりながら、出席扱いを考えることが大事だと思っています。

その上で課題と思っているのは、どのように情報を共有するか、(進路については)個別の対応で進んでいくので、個別の情報は一般に広く共有されづらいことがあります。学校なり教育委員会から情報提供するところを考えないといけないという感じはしています。

また、フリースクールでどのような学びができるかということも、保護者に情報提供を求められないと、教育委員会から積極的にできないことも課題としてはあると思っています。

荒井座長： 現実として「出席扱い」を望まない保護者がいることは事実ですし、評価不能の「\*」(アスタリスク)あるいは「/」(スラッシュ)のまま、高校入試をした方がメリットが大きいと判断をされるご家庭もあると聞いています。その場合、同じ場で同じ学びをしておきながら「出席扱い」になる子とならない子がいる事態は保護者の立場からすれば、理不尽さを感じるのではないかと思います。そこで、「出席扱い」に関しては、昨年度の『はばたき』でかなり土俵を広げることができたのではないかなと思っています。

市川委員： 三輪委員のお話とも絡めて、不登校だと調査書を書いてもらえない、簡単に言えば評定を書いてもらえない、評定を書いてもらえなかったら、全日制の公立高校にはいけないと思っている方があまりに多いし、フリースクールやっている方でもそう思っている例もあります。もう初めから通信制とかそのサポート校しか考えていない方がたくさんいます。そのため、学びの継続支援というのは、今現在の学びをどう支援し学びを続けていくかっていうことと同時に、次の学びの場へ継続して進めていくかという二つの問題があると思います。中学校の立場からすれば中学校の成績がなくても高校に進学できるとなれば、本当に戻って来ないのではないかと、フリースクールで終わってしまうのではないかと等いろいろありますが、そこは子ども中心に考えていけたらいいなと思っています。

荒井座長： 今後は、ある時点で評価を行っていくことが、その後の人生にどのような機能を果たすことになるかを考えていく必要があると思います。

現状では多くの都道府県で、不登校特例校や校内フリースクールなどの枠組みを設けていますが、その後に想定される評価問題に関してどの程度検討を加えているのか、少々不安に感じております。

「評価」という言葉が与えるニュアンスは人によって異なります。知識・技能に限ったテストの結果だけを評価としてとらえられがちではありますが、子どもの学びを支えていくという観点からすれば、どの保護者もおそらくアセスメントという意味で子供の育ちや学びを看取っていく行為については大切であると感じられるのではないかと思います。ただ、子どもたちを勇気づけたり奨励したりする声かけをどうしていくか、取組の成果の記述をどのように充実させていくことができるか、まだまだ検討すべき課題が山積しており、合意が取れていない状況ではないかと思っています。

そこで、学習指導要領において評価のあり方についての記述がありますので、共通認識を持つべく資料6から資料8について、事務局で説明をお願いします。

#### (4) 意見交換

##### 〈事務局 資料6～資料8説明〉

三輪委員： 一点質問です。資料6の学習評価について、児童生徒および保護者に十分説明し理解を得るとするのは大事です。これは別に不登校に関係ないけれども、きちんとどの生徒あるいは保護者に対しても為されるべきだと思うが、実施状況について伺います。

学びの改革支援課： 評価に関する説明周知等を行っているかという直接的なものは現在持ち合わせてございませんが、類するものというところでは学校経営概要等の調査において行っているところです。

三輪委員： 荒井座長がお話された評価の考え方を理解していただくためにとても大事なことと  
思っています。ちょうど学習評価のあり方・仕組みが変わったところですので、こう  
した取組をきちんとすべきと思っています。

荒井座長： 今回の学習指導要領の大きなポイントは、あらかじめ自分がどのような観点でど  
のように評価されるかについて、教授者も学習者も共通認識を持ちながら学びを展  
開していくべきであるという前提があります。

資料7から保護者やフリースクール関係者の方にとって、評価についての理解は  
まだまだ進んでいない現実があります。また校長アンケートに関しては、学年相応  
の学習をしていない場合どう評価すればいいのか、という論点が示されています。  
評価できる教科とできない教科がある場合、他の生徒と同じ評価軸で評価を行うの  
かどうか、悩ましい状況にあります。

それでは残りの時間を使って意見交換に入ります。私の方で三つほど論点を提案  
したいと思います。

一つ目の論点は、フリースクールをはじめとした民間施設と教育委員会および学  
校との連携の状況です。特に、フリースクールでの学びあるいは自宅における学び  
に対して、学校や教育委員会はどのような形で何を把握をし、それをどのように評  
価に結びつけているか、情報共有できればと思っています。

二つ目は、学校内における不登校支援の実践事例の共有です。特に、「校内フリ  
ースクール」の取り組みに関して情報共有していきたいと思っています。

三つ目は、現状ではどのような評価が行われているかです。

では、一つ目の民間施設と教育委員会・学校との関係について、市川委員から現  
状をお知らせください。

市川委員： 私達まだ1年と数ヶ月で事例が少ないのですが、昨年度6名でスタートし、現在  
20名の子供が通っています。小学1年生から中学3年生、それからこちらを卒業し  
た高校生が通信制のサポート校に行っていて、授業がない日に来るという状態です。  
学校との連携は初めのうちは不登校の児童生徒がいる学校の校長先生のところに保  
護者と一緒に私がお挨拶をして、どのように連携していくかという相談を全ての学  
校で行っています。今現在12校の学校と関わっています。12校あればそれは実に

様々で、一番進んでいる事例（A小学校）は、出席それからフリースクールの様子について、スプレッドシートを共有して、そこに我々が出席欠席を記入するとリアルタイムで学校側も状況を把握できます。そして我々がこういうことで一日過ごしたというのを3行ぐらいで毎日記入したものを、担任の先生それから管理職の先生がリアルタイムで見えています。またそこに写真を貼り付けるなど様々なことをやっています。

B小学校では、研究部の先生方が視察に来てくださって、スプレッドシートの活用を検討しています。それをいくらかでも評価に活かせたらと考えてくださっています。C中学校では教頭先生の方からお話があって、どういう学びを、いつ、どれぐらいの時間やったかっていうことを詳細に記録していただければありがたいということです。シートを作って子どもたちは自分がやった勉強について、これをAIタブレットを使いましたとか、AIアプリを使いましたとか、こういう勉強して何分間こういう単元に取り組んで勉強しましたっていうことを記憶して、それを蓄積している子どももいて、それを定期的に学校さんの方に見ていただくというような形をとっているところもあります。

通室している中学生が、公立高校に行きたいということで頑張っている勉強を進めています。本当によく学んでいます。そういう子どもがテストを受けたいとなった。しかし、学校に行くと緊張していつもの力が出ないということで、我々としては合理的配慮として、OZ FieledにてZOOMなどでその様子を中継しながら受験することはできないか、同じ時間に同じタイミングでできないかということをお申しましたが、やはり授業に出ていない人に対する評価はしかねるということをお伝えされました。できれば授業の様子を視聴してもらいたいと、その上で話をしたいというような話もあります。ある程度は理解できますし、授業を受けたその成果を評価している、と言われてしまえばそれまでなのですが、そういうようなことで、ちょっとやる気がくじけてしまいそうになっている子どももいます。一方、こちらで別室で受けるのだからフリースクールで受けてもらっても構いませんよと言ってくださる中学校もあります。それをもって普段の様子、やりとりを持って評価に少しでも書きたいと言ってくれる学校が増えてきているのは確かです。

学校との最低限の交流としては出席、欠席について、こちらが学校側の必要な内容に従って毎日つけていますので、月末にそれぞれの学校毎にまとめてメールでパスワードをかけて、教頭先生にお送りして、いくつかの学校にはこういう様子で1か月過ごしましたっていうようなことを書いて、提出しています。

荒井座長： 非常に興味深い事例でした。私も県内様々なところを訪問させていただいていますが、多くの中間教室や校内フリースクール等々においても月末締めで、出席の状況をエクセルシート等々で報告をするということと、1ヶ月まとまった形で何月何日にどんなことをして、こういう様子でしたということ、FAXあるいは庁内便的なもので回していくことが多いわけですが、先ほどの評価までは踏み込めていないのではないかと感じています。

今お話で12校と繋がりがあるとおっしゃいましたが、教育委員会とのやりとりは基本的にはなく、ほぼ学校との直接的なやりとりっていうことで理解してよいですか。

市川委員： 基本的にはそのようになっています。ただA市は教育委員会、教育長さん以下何度か足を運んでいただきました。A市からくる子が多いので、興味関心を示していただいて、教育長さんは教育委員全員を連れて見に来てくださって、しかも、かなり長時間見てくださって、子どもたちもたくさん話をしてくださって、A市の不登校支援に関わる会議等にもお呼びいただいて、連携をしていこうとしてくださっています。大変ありがたいことだと思っています。それ以外のところは校長先生もしくは教頭先生というところが多いです。

荒井座長： 昨年度末においては、評価について具体的に何かやりとりというのはできましたか。それとも昨年度の時点では難しかったという評価になりますか。

市川委員： 現状としては難しかったです。

荒井座長： ではなかなかまだそこは踏み込めずというふうな形ですね。ここで事務局にお伺いしたいのですが、テストは、授業中にリアルタイムでその場で受けなくてはいけない、あるいは別室で受けなくてはいけないといった根拠規定はありますか。（ないですかね。わかりました。）こういった一見些細なことのようには思えることでも、高いハードルとして感じている保護者もいるかと思えます。学校や教職員の価値観によって相当程度で差があるのではないかと危惧しています。あらゆるリソースを活用して一生懸命学んでいるにもかかわらず、その瞬間に学校に来ないと受験できないことに絶望感を感じているお子さんも現実としておられるわけですから、あえてお聞きしました。

他にフリースクールや学校以外での学び、お子さんへの対応で事例をご紹介いただけたらと思いますけれども、いかがでしょうか。赤羽委員、桂本委員、外部の教育機関との関係はいかがでしょうか。

赤羽委員： 箕輪町には民間のフリースクール等はないので、そのための校内フリースクールを立ち上げたという経緯があります。現状としてはこの程度しかお話できませんがよろしいでしょうか。

桂本委員： 長野市には民間のフリースクールがいくつかありますが、実際そこに子どもが通ったってという事例がないので、紹介することができません。しかし、長野市には中間教室があるので、定期的に行くなどして丁寧に対応するようにしています。不登校の子どもそれぞれの子に合ったことをやっていきたいと思っていますが、自分の学校でできているかどうか心配なところですが、丁寧に取り組んでいこうとは思っています。

市川委員： A市の学校は教育委員会の方から「自分のクラスの子どもなので、積極的に見に行くように」という指示が出ているということを感じています。しかし担任の先生は正直困っています。なぜかというと学校を空けてこなくてはいけない。中学校の先生は空き時間とかで工面していますが、小学校低学年の先生とかはクラス空けることについて、本当は学校でバックアップ体制がしっかりしていなければいけないと思うのですが、現状そうはできない。その中で学期に1回、2ヶ月に1回は訪問するとなると、先生たちはとても困っていて私達の方に相談が来ます。その場合、Zoomで流します。何回か来ていただき関係性ができているのでZoomで大丈夫じゃないですかという話をします。先生たちもそうすると助かりますということで、中継してその子の様子やその子とのやり取りを進めています。

荒井座長： 求められるコミュニケーションのスタイルはその子や当事者によって違うと思います。昨年度まで中学校の校長先生を務められていた三輪委員にお伺いしたいのですが、民間施設との関わり、出席扱い等いかがでしたでしょうか？

三輪委員： 出席扱いについては先ほどお話したように、保護者や子どもと話をしながら、出席扱いにしてほしいと言われる場合には、担任ではなく校長が直接フリースクールに行って状況を把握しています。連絡については、先ほど市川委員から学校の様子に沿ってという話がありましたが、私の学校もそうでしたけれども、民間施設の書



式によって提出していただき、施設によっては直接担当の方が学校へ来て説明しながら報告していただくことができました。評価については、難しいところですが、特に3年生でいえば二つに分けていまして、通知表に記載するものと調査書に記載するものと、少し区別をつけていました。これも全て保護者に説明をして、選択をしてもらうやり方をしていました。通知表は比較的積極的に評定も含めて出ていくというやり方でしたけれども、調査書については、文書による評価も高校側でも丁寧に見てくれますので、個別状況等、様々な方法で高校とは連絡を取りますので、「\*」（アスタリスク）にはなるが文書による評価を望むのか、それとも、積極的に評定をつけてもらいたいのか、リスクも含めて説明しながら選択してもらうようにしています。調査書については「\*」（アスタリスク）で文書による評価でお願いしたいということがほとんどでしたが、ただこれも本当に道半ば、というか、その程度でいいのかという話があって、直接フリースクールでの学びを評価評定に反映することはできていない状況ではありました。

荒井座長： 今、「文書による評価」と「数値による評価」という話題が出ましたが、私が知り得る情報の限りではありますが、例えば、数字の場合、当該生徒と学校あるいは学校外の施設と一生やりとりを重ねどんなに頑張っても高い数字の評価になかなかならない現実があります。どんなに頑張っても2以上いかないなど。「文書による評価」にして「\*」（アスタリスク）のまま高校入試に臨んだ方が得策と考える事例もあると伺っております。これに関しても、一律にこうすべきだといったルールを作るべきか、様々な選択肢のパターンを事例ベースでお示しすべきか検討する必要があると思っています。これについて教育委員会や教育事務所がリーダーシップを発揮していく必要もあると思います。

次に、二つ目の論点に行かせていただけたらと思います。二つ目の論点は「校内フリースクール」の実態です。先駆的な例として、箕輪中の赤羽委員に経緯と現状と課題について整理してお話いただけたらなと思います。よろしく願いいたします。

赤羽委員： 箕輪中学校では、不登校生徒たちの居場所をどうするのか、また繋がりをどうつけていくのか、というところがまず出発点だったと思います。その時に有効に機能したのが GIGA スクール構想です。箕輪町の場合は Chromebook を導入しましたが、その Meet の機能を使って、今までは担任が家庭訪問してもなかなか顔を出してくれなかったお子さんと、まずは Chrombook を通じて繋がりを持とうというのが出発点であったと思います。

昨年度赴任したときに、非常に印象に残る出会いがありました。校内フリースクールF組は、令和2年度末に前校長の思いで立ち上がり、準備が進められていました。パンフレット等により全家庭にも周知されたという中で、学校には行けないけど Meet では繋がれると、そんな生徒が出てきました。赴任当初の4月のある日、「校長先生今繋がっているのので来てください！」とF組担当の先生に呼ばれての出会いです。そういった出発でした。その辺の経緯は教育指導時報5月号にも紹介されています。ある生徒は1年の時に不登校で学校に全く来られなくなったんですけど、担任との繋がりの中からF組が昨年度できたことを知り、Meet で繋がるところから、学習への参加を始めていった事例はあります。

本校、校内フリースクールとは別に、校内の中間教室的なステップルームという場所と、それから学校から歩いて3分ぐらいのところに町の間教室があります。それぞれに自分で行ける場所を決めながら、まずは居場所づくり、そしてできる活動を広げる、と進めています。

荒井座長： F組の担任の先生は、学びの改革実践校の加配教員としての1名という理解でよいですか。

赤羽委員： その通りです。実は非常勤ということで1日の半分しかいられない先生です。町の方で賛同していただいて、あともう半分分を町の支援員という形でつけていただいて、昨年度と今年度は1日常駐するような形で対応をしています。

荒井座長： どういう方が担当していただいていますか。

赤羽委員： ベテランの講師の先生ですけど、子どもたちへ繋げることが非常に上手です。数学と国語の免許を持ってらっしゃるので、多方面からの支援ができる先生です。ただ加配をつけてもらえばよいということではなくて、先生のパーソナリティも実は大きいかと思っております。

荒井座長： ステップルームの利用者とF組の利用者っていうのは、何か特徴的なところありますか。あるいは①の内容でも構いません。

赤羽委員： ステップルームは、教室には入りづらいけれど登校はできるというお子さんで、一方、F組は登校も難しいお子さん。町の間教室の方はどちらかという中学校

に入ってからというよりは小学校からなかなか学校に行きづらいお子さんが継続して利用し、小中の接続を中間教室を通して行っている側面があります。

荒井座長： F 組からステップルームへ行く兆候はありますか

赤羽委員： まだその動きは起きてないです。

荒井座長： 箕輪町は小学校 5 校で中学校 1 校ですが、不登校のお子さんに対する連絡会や協議会の取組はされていますか。

赤羽委員： まずは町の校長会でも町の間教室に視察に行ったり、私個人としても、昨年度の三年生の生徒の学びの様子を見せてもらいに伺ったりしています。

荒井座長： F 組、ステップルーム、中間教室と三つあるわけですが、現状ではそこに来ればあるいは Meet で繋がれば出席扱いにはできるというふうなことであって、その先にあるかもしれない評価については、現状では手付かずということでしょうか。

赤羽委員： 試みも始めているのですが、先ほどの校長アンケートを見ながら、各校の校長先生方が評価について悩んだり、苦しんだりしているところは本校の苦しみでもあるなと思いました。また先ほど三輪委員がおっしゃったように、選んでいただくような、「\*」（アスタリスク）で F 組での学びの様子、ステップでの学びの様子をお伝えするのか、数字での評定をつけていくのかっていうのは家庭との相談で決めるようにしています。ただそれが整備されているのかというと、まだまだ途上ではあります。

荒井座長： おそらく保護者の子どもに対する見立てや思いは、日々揺らぐのではないかと思っています。最初は「\*」（アスタリスク）でいいですよと言っていたものの、子どもが少し学びに向き合い始めると要求内容が変わっていったりとか、また逆もあったり、そういった揺らぎがあるようにも思えるのですけれども、そのあたりはいかがですか。

赤羽委員： 難しい質問ですが、揺らぎに直面するということはまだないです。

荒井座長： 他の事例ですと、ある程度保護者の意向が働くことがあり、うちの子に対してはこうしてほしいと学校側に伝えると、学校はそのように対応しているということも聞くことがあります。学校にとっては毎回の單元ごとにその子の評価のあり方を検討するよりは、「\*」（アスタリスク）の方が処理しやすい可能性がありますし、絶対評価といえども、他の生徒さんとの公正さをどう担保するかが課題となると思います。

ある学校では「\*」（アスタリスク）ではなくて、できる限り通常の評価をつけるという目標を持って、それぞれの教科の先生方がその子の学びを可視化して評価に結びつけていくチャレンジを行っている中学校もあります。F組の取り組みはまだ始まったばかりですが、保護者の声、生徒の姿、校長先生から見ていかがでしょうか。

赤羽委員： 昨日3年生の男子生徒が放課後に登校してきまして、ちょうどその学びの様子を見ることができました。その子は、今まで夜間に来てF組と繋がって学んでいた子ですが、昨日は明るいうちに学校に来て、1年生のテストを受けました。そしてその出来がよく、私が「ああ、やるねえ」と伝えたら、にこっと応えてくれました。3年生で学ぶべき勉強ではないかもしれないけど、その子としては明るい時間に学校に来られて、そして他学年のテストではあるけれど、自身で手応えを感じている姿も見られています。

荒井座長： そういうことだけでも保護者からすると大きな変化だと感じると思います。全く外出できなかった子ができるようになることはご家族にとって大きな変化だと思います。

近藤委員： 箕輪中のF組での授業には多分空き時間の先生方も関わっているかと思いますが、カリキュラムなど作られていますか。あるいはまるっきり個別の対応をされていますか。

赤羽委員： F組に関しては利用者が12名ほどです。しかし時間帯がずれているので、ほぼ1人の先ほど紹介した職員が担当をしています。一方、校内中間教室は相談員とその子に関わる各担任の空き時間を利用して対応しています。

近藤委員： 最近の活動は把握できてはいませんが、長野市でも、有志の先生方が不登校の子どもたちを夜間に集めて授業を行っていた事例がありました。学習したいという意欲の

ある子のニーズは、箕輪中のF組のように拾えますが、学習に意欲が向いていない子たちについては、どうやって足を向けてもらえるようにするかが難しいとのことでした。中間教室などでも、学ぶということを子どもたちに考えさせていくことは、大変苦勞されているのではないかなと思います。学習をするということが前提にならない子どもたちへの対応ということも考えたらいいのではないかなと感じています。

荒井座長： いくつかの層があるような気がしてしまっていて、一つは家からなかなか出られない、人とのコミュニケーションをとることが困難な状況にどのように向き合っていくのかという段階です。これは今回ご協力いただいている4自治体においても、アウトリーチとしてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどが不登校支援コーディネーターも関わりながらチャレンジしていただいておりますが、保護者や本人と面談すること自体なかなか難しいという状況かと思えます。

もう一つ学習に向かないという意味では、一律的に学ぶということに対する拒否感をお持ちのお子さんもいると思いますが、市町村設置の中間教室に行くと、エネルギーが体から溢れるばかりというケースもあります。両者の対応はずいぶん違うのではないかなと思います。

荒井座長： では3つ目の論点、「評価の実際」ということで、今日お話伺った限りでは、学びの改革支援課でお話いただいた学習評価については、まだ踏み出せていないといえますか、途上という感覚を持ちました。皆様方いかがでしょうか。

市川委員： 私達のところに通っている子ども、A市の中学校の子どもさんですが、距離も離れていて、大変苦勞されて通っています。お家の方が駅まで送り迎え、北しなの線に乗って牟礼駅まで来て我々の送迎車に乗ってくるということをやっています。その子はもう勉強はいやだと、中学2年生ですが勉強はしたくない、1ミリもしたくない、遊びだけでよかったら来てやってもいいみたいな感じで来たんです。ものすごく元気。お母さんもととても困っていて、校長先生が紹介をしてくださったという事例で、有り余るパワーを発散させるということであちに来ました。

最近ですが、学び方を学ぶ経験をしたらいいなってという願いをすごく持っています。私は、居場所じゃなくて学びの場にこだわりたいと思ってフリースクールを作ったので、そのあたりすごくこだわっていて、「ピザクラブ」を作りました。ピザ窯を作ってあったので、そこでピザを作ります。薪を燃やさなきゃいけなかったり、自分でこねたり、発酵して我慢して待たなくてはいけなかったり、自分でレシピ作ってなんでもできる自由度もあるし、手の内に収まるし、繰り返しやれるということもあって、ピザってすごく面白いんです。その前に炎の達人になろうと言って火を

つけて上手に薪を燃やす、コントロールできるようになろうと言って実験をやったときに、小学校の理科の燃焼の実験を一緒にやったんです。そうしたら、すごい勉強するんですよ。火が燃える条件のメモを作ろうとしたら、「字なんて絶対書きたくない」と言っていたのに、一生懸命書いているんです。怒りながら書いているんです。ピザ作ったときに「コツ書いておいた方が次もっといいものが作れるんじゃないの」と言ったら、「うん、わかったメモする」って言ってメモしているんです。国語の勉強、理科の勉強もやるし、段取りをつけるっていう力もつくし、仲間と協力する協働するっていうこともやっています。メモで記録する大切さに気づいて「メモ書いといたら、次失敗しないものね」とか言いながら書いています。

彼はよりよい社会の構成メンバーとして、世の中に出ていくために必要な力を相当地に身につけているんです。そこを記述していく。中2の評価として付けたら「\*」（アスタリスク）、数値でつけてしまったらおそらく1か2しかつかない。

去年、私は北部高校の地域学習とフューチャースクールに月1回ぐらい行って探究学習のお手伝いをしていました。子どもたちと関わらせていただいた中で、彼は十分その中でやっていけるなと思ったんです。中に入ったらきっと面白いだろうなと思っています。そういう子が、どういう評価をしてあげればそういうふうに学びを継続させていって高校でも楽しく学ぶということができて、さらにその明るい気持ちを「俺、絶対勉強なんかしたくない」とか、「どうせ俺なんか…」とかいうのではなくて、楽しかった、こんなふうにやったら良かった、というポジティブな気持ちを持って社会に出ていく、それに繋がる評価っていうのは何なのかっていうことを、決めちゃうのではなくて、そういう例をいっぱい出していけたらいいなと思いました。

フリースクールだからこそできることはフリースクールに任せてとありましたけれど、本当ゼロベースで子どもにとって何がいいのかを考えることはすごく大事だと思っています。

先ほどF組の話で、F組っていうのは本当に学校に戻ることが目的なのかそれともその子らしく最後まで学んでいくことが目的なのかっていうところによると思うのですが、そのあたりはどうですか。

赤羽委員： やはり学校の枠組みとしての限界は感じています。その子らしさを追求しているときに、一般的な学習評価の枠組みで評価してはいけないという学びは確かにあると思います。むしろ今F組で大切にしたいなと思っているのは自己肯定感とか自己有用感とかその子のいいねを大事にしたいと思っています。やはり学校でできることとフリースクールでできることは分けて、考えていけるとよいと思っております。

荒井座長： 自己肯定感や自己有用感は、自分以外の何かの対象物との関係性の中で醸成されるものではないかと思っています。他者との繋がりかもしれませんし、自然や生き物との触れ合いなど、様々な体験を通じて獲得されていくものだと思います。従いまして、今回のモデル事業ではいちご農園や牧場体験などで、エネルギーを取り戻す一つのきっかけになるのではないかと思っていますし、この点は全国と比べて長野県は「地の利」があると思っています。関係者でのネットワークをうまく活用できるような仕組みがあるといいと感じています。

三輪委員： 市川委員のお話を聞いて、「そういう学びだよな」と思ったところで、二つお話しします。私も昨年上諏訪中学校で中間教室を廃止して、相談フリールームを作りました。「中間」というのはどこの中間みたいな話になり、家と教室の中間みたいなネーミングがそもそも良くないと思いました。その相談フリールームで完結してよいのではないか、加えて言えば、義務教育である以上、学習に向かない子であっても、あるいは教室に行かれない子であっても、全ては無理でも可能な範囲で学校が担うというコンセプトで作りました。

自分で時間割を決めますので、例えば1時間目くつろぐ、2時間目 YouTube とか、3時間目数学とかそのような感じでやっていくのですけれど、そうやってやりながら、昨年度5人のお子さんが、新しいカードゲーム作ってやり始めるとか、その結果、自己肯定感を高めていくこともできて、中学校を卒業し次のステップへ進んでいきました。そういう実践が一つです。

二つ目、先ほど市川委員がお話されたような学びをどのように評価したらいいのかということです。今回の意見交換のテーマとして、学習評価ではなく、多様な学びの評価となっていることはとても大事と思っているところです。ただし学びの評価なので、学習評価はある意味その一部であるという考えでいけばと思っています。学習評価は誰が誰を評価するという話もあって、学習指導要領に則った学習をした結果として、それがどうだったのかみたいなイメージがあるのですね。もう一方で、今あったような自己肯定感とかそういうことを評価する指標が、新たにあってよいのではないか。しかもその指標自体は、子ども自身が評価していくという仕組みがあってもよいのではと思っています。

そういうことを考えると、県教育委員会では数年前に県立中学校・高等学校で新しい学びの指標というのを策定して、試行期間は終わり本格実施に入っているのではないかなと思います。そうしたこれまでの実践を参考にすれば、学習評価と新しい学びの指標とをセットにしたような指標をすべての児童生徒が取り組めるような

形にして、その新しい学びの指標は、子どもが評価していく。そしてできればそれが調査書等今後の高校入試に繋がる仕組みにできないのかと思ったところです。学習評価にポイントを絞ってしまって評価していくことは無理があることは多分共通認識だと思うので、新しい仕組みってことを考えていく必要があるのだろうなということをおもいました。以上になります。

荒井座長： 土俵の設定に関して貴重な意見をいただきました。「中間教室」というフレーズと関わって、文部科学省も「適応指導教室」という呼び名はやめるべきだということまで言っています。今三輪委員がおっしゃられたように、不登校のお子さんにとって、自己決定の経験を積み重ねていく、小さなものでも自分で決めていくことを経験させていくことはとても大事だと思います。

最後に三輪委員がおっしゃった、学習評価を多様な学びの評価の一部として、土俵を設定していくことは壮大なチャレンジですが、時代はその方向に来ていることは間違いないかなと思います。

近藤委員： 調査書が大事にされるようになったのは、私の記憶では、昭和40年代末からだったように思います、それまで高校入試は、ほぼ入試テスト一本だけで決まっていたようです。そのやり方では、その日の出来・不出来もあるし、9教科の試験は非常に詰め込み教育で大変だというような議論もあって、普段の学びを大切にしている調査書が重視されるようになってきたように思っています。それが少し偏り過ぎ、市川委員のお話のような学びをしている子どもたちが立派に学びをしているところを評価できなくなり、今の評価方法があるようになったのではないかと思います。評価の概念を相当変えて、多様な評価をどこまで広げるか、学びたがらない子どもたちについて社会的に自立し、自己肯定感を持って生きていくためのどのような評価をしていくか等、もう少し違う概念のものを相当取り入れていくっていう時代になってきているんじゃないかなと思います。数値化しないという評価は、私が現役だった頃は、高校にお話する際に大変その子らの理解をしていただく上で、良かったという意識を持っていました。数値化すると、どうしても相対評価になってきてしまいますから、点数が上がらない。個別最適化と言われる時代になってきていますので、「\*」（アスタリスク）がつくことで、その子のことがむしろ高校に良く伝えられることを保護者の皆さんに話していかないといけないと思います。

荒井座長： 「自然に戻ろう」という大きなコンセプトかなとも思いますし、点数化とアスタリスクの狭間が今エアポケットになっていると思います。ここの部分に関して豊潤なものが作れるかどうかの一つのポイントになると思っていますし、評価と連動して入試のあり方も再考していく必要があると思います。



あと 10 分ぐらいではありますけれども、もし教育事務所の方で現場の声を少しご紹介をいただけたらなと思います。

東信教育事務所 田中主任：

今ここで行われている議論はすごく進んでいることで、現場ではまだ評価どころか、出席扱いの段階で戸惑っている学校も多いという印象です。具体的には、先ほどから校長判断でいう話が出ていますが、校長先生の一存では決められないというお答えをいただくところがとても多いです。学校長が判断すると学校間での差が出てしまうため、市町村教育委員会の意見を聞きながら、ということが現実のようです。

そしてますます難しいのが評価で、一緒の土俵でやっていないお子さんを評価することは難しいと思われている先生方もいます。

逆にお聞きしたいのですが、三観点のうち一つでも「\*」（アスタリスク）だと全体の評定を「\*」にしなければいけないのでしょうか？不登校のお子さんだと主体的に学ぶ態度が「\*」になる場合が多いとおもうのですが、例えばテストで二つの観点は評価できるのに、一つの観点だけが「評価不能」となった場合、全体として「評定不能=\*」になるのでしょうか。このあたりの価値観も現場ではいろいろだったりします。

荒井座長： 三観点で一つだけ「\*」（アスタリスク）だと、全て「\*」で評価せざるを得ないという根拠規定はありますか。

学びの改革支援課 田中主任：

一つ「\*」（アスタリスク）がついていれば評定も全て「\*」にしなければならぬというルールはないと考えております。

荒井座長： おそらく論理的に考えれば解決が導き出せる事柄が、学校現場では、前例踏襲や同調圧力によってリスクを負えなくなっている可能性があります。ことが実態としてあるぜひ条件整備の責務を担う役割が教育行政や教育事務所がリーダーシップを発揮してもらいたいです。

南信教育事務所 倉田主任：

今日、特に市川委員のフリースクールのお話聞かせていただいて、やはり子どもたちの自己肯定感、あるいは自己有用感が高まるっていうことは、生徒指導上

でも非常に大事にされている部分だと思います。フリースクールならではの取組によって、子どもたちの自己肯定感を持たせてあげることができます。子どもたちの目線に立ったときにそういった自己肯定感を高めてあげることが大人としても大事であると聞かせていただきました。評価について非常にそことセットにするのが難しいなと思って聞いておりました。

北信教育事務所 小林主任：

市町村教育委員会や現場でお話を聞く中で、特に中学3年生の不登校等のお子さんを抱えている親御さんはこの先のことを心配されています。事務所のスクールソーシャルワーカーを派遣して関わっていますが、進学を考えるときに自分たちの学びがどう評価されてくるかという部分、出席の問題もそうですが、それらが絡んできて、全日制は最初から視野に入れていないケースがあるなど、生徒さんのところへの情報が少ないということを感じています。やはりこの先に向けての連携や情報の共有をどのように進めていくべきかを考えています。

荒井座長： 『はばたき』を出して、それによって救われた可能性がある子も一定数いるかと思う一方、まだまだだという方々もやっぱりいて、居場所の充実、自己肯定感等々を育むために、引き続きいろいろな策を講じていかななくてはなりません。

一方で、近藤委員、三輪委員がお話されたように、学習評価については現時点では可視化されていませんが、潜在的なニーズはあると思っています。例えば、今日はあまり議論できませんでしたが、ICT等を活用した場合での評価についてもまだまだ検討の余地があります。ただこうした場での議論の水準と現場での一体は相当程度ギャップがあるということが本日よくわかりましたので、引き続き皆さんと情報共有しながら進めていけたらと思っています。

少々時間を超過しましたがけれどもここで一旦事務局の方にお戻しできればと思います。ご協力いただきありがとうございました。